

一、はじめに

洒落本は十八世紀なかば、宝暦前後に端を発する遊里文学で、本稿で取り扱う『浪花色八卦』（宝暦七年、一七五七年頃刊）はその最初期に刊行され異例の人気を博した作品である。本書は大坂を桔梗・竜胆・鶴菱・花菱・葛菱・檜扇・宝結・桐臺の八つの区画に分類し、八卦の体裁を取りながら、大坂の各遊里や芸妓、そこに通う遊客の様子を説いた、遊里評判・遊里案内書の先駆けとされる上方洒落本で、占書の趣向を洒落本に組み込んだ最初期の作品とされることも大きな特徴であり、本来は離・坤・兌・乾・坎・艮・震・巽の各卦を八卦とする部分を桔梗や竜胆などの「紋」に置き換えるといった工夫が見られる。

当時の評判の高さは、安永二年（一七七三年）刊行『浪花今八卦』、天明四年（一七八四年）『浪花今いま八卦』などの模倣作が生まれたことや、後の洒落本に『浪花色八卦』を引用した様子が見受けられることから明らかであるが、その人気の理由に関して中野三敏氏は『洒落本大成』第二巻（一九七八年）解題において「かかる占書模倣の趣向は、宝暦四年刊の新井白蛾作『易学小筮』や同六年の『古易一家言』などの小型通俗占書の流行を背景にしたものである」とは言うまでもあるまい」と述べているが、作者の性格や著書の性質を考慮すると、単に占書の流行に便乗するために八卦の要素を取り入れたとは考えられない。そこで、本稿では作者がなぜ洒落本に占書の体裁を組み込むことにしたのかを、作者の人物像と当時の易学の需要形態から見出す。

## 二、作者「外山翁」

本項では初期洒落本としては珍しく、作者像が明確となっている「外山翁」を知ることによって、『浪花色八卦』が擁する批判的性質を見出してみる。

洒落本の作者名には戯号という所謂ペンネームが使用されているため、現代を生きる我々がその人物像を把握することは困難であるが、幸いにも『浪花色八卦』の作者「外山翁」については中村幸彦氏「洒落本の作者」（『近世作家研究』、一九六一年）、肥田皓造氏「浪花色八卦の作者」（『上方学藝史叢考』、一九八八年）の二本の論文によって、俳諧師・浄瑠璃作者としてそれぞれ複数の号を使用しながら活動していた大坂の文人であったことが証明されている。俳諧師岡本律中としては『俳諧耳勝手』（宝暦七年、一七五七年）などを編み、また浄瑠璃作者松田ばくとして『騷方武士鑑』（明和五年、一七六八年）、『妹背山婦女庭訓』（明和八年、一七七一）、『桜御五十三駅』（明和八年一七七一）などの有名浄瑠璃作品を近松半二、三好松洛、栄善平らと合作したことが判明しており、外山翁が多様なジャンルに携わっていた非常に学識豊かな人物であった様子がうかがえる。加えて、宝暦五年（一七五五年）の『扇会評林』では和漢学識を必要とする扇合の会に参加していた様子が記され、天明二年（一七八二年）刊行の『歌系図』という上方歌一覧にも歌をとられるなど、外山翁がいかに通人であったかがわかる。

このように、多才ぶりを随所で発揮していた外山翁であるが、その遊里関係の著述には実在の俳人や、俳人をモデルとした人物が登場する。明和六年（一七六九年）刊行の茶屋評判の洒落本『肝相撲』には茶屋女の客あしらいのうまさを描写する場面があり、淡々（江戸中期の俳人。松木淡々、半時庵淡々）が魚を「牛の舌」として提供された際には怪しんで断ったにも関わらず、同じ魚を「笹かれい」として提供されると雅なものとして喜び食したという淡々を批判的に描い

た逸話が見られ、同書において俳人の逸話を引用しているのはこの部分だけである。加えて、明和五年（一七六八年）刊行と思われる『雅仏小夜嵐』においても、冥土を舞台に実在の俳人をモデルとした人物が登場させ、地獄極楽で門人を集める様子を描いているが、決して好意的とは言えない内容となっている。

右の二例のように、外山翁は自身の著した洒落本において、実在する人物を批判的に描こうとする傾向にあるということ踏まえると、『浪花色八卦』にも何らかの批判的意図が含有されている推察される。とするならば、『浪花色八卦』における批判対象は誰なのか。この疑問を解消するためのヒントがタイトルに含まれる「八卦」という要素である。

## 三、批判対象 新井白蛾

新井白蛾は宝暦元年（一七五一年）頃から寛政三年（一七九一年）まで京都で活躍し、晩年は藩儒として加賀藩に仕えた朱子学者で、『易学小筮』、『古易一家言』などの吉凶占断の実用書を書いた人物でもある。『易学小筮』は明治時代になっても出版され続けた有名な易占書で、白蛾の代名詞的書物であるが、この小冊子は江戸時代の易占を考える上で非常に難しい立場にある。江戸時代中期の日本の易の主流は、明代の万暦年間に輸出された「断易」に倣っていたのに対して、白蛾の『易学小筮』は漢代初期に確立した「周易」という古い形式に倣った少数派で特異な存在であった。儒教経典としての易の体裁を尊重した白蛾は時代の潮流に逆らうように「断易」を否定して伝統的な「周易」に倣おうとするが、時代が求める機能的で即時性の高い易占と伝統の両立を目指しことによって様々な矛盾が生じることとなった。朱子学の一環として易の実践を試みていた白蛾は、伝統的な「周易」に倣う自らの易理論は高等で由緒あるもので、比較的伝統の浅い「断易」に倣う売卜者（生業として易を行う人）の占術的な易は下等であると考えていたようである。しかし、時代が求めるのはより機能的で簡略化された易で、白蛾が唱える「周易」に依拠する易理論では人々のニーズに応えることはできなかった。結果、白蛾は六十四卦に固定した吉凶を当てはめる、という「断易」に依拠した形式を組み込むことで『易学小筮』を完成させた。大坂の藤屋弥兵衛（星文堂）という強力な後援者を味方につけた白蛾の『易学小筮』は庶民からの不動の人気を得ることに成功したが、学識ある人からは矛盾に対する指摘や批判が相次ぎ、『非白蛾』（明和五年、一七六八年）という痛烈な白蛾批判の書物が出版される程であった。この一連の騒動を認識していた外山翁は自身の土俵で白蛾の矛盾を指摘するべく、洒落本『浪花色八卦』を記したと考え、洒落本と八卦という要素の関連性が見えるだろう。『浪花色八卦』序文では「周易」の内容を遊里の様相に照らして説明しているが、「十翼の伝は世に鳴る艶を称に歌に作り糸にのせてうたひ流すの義也」と孔子の言葉であることを強調し、朱子学の一環として易占を行う白蛾に対する皮肉が込められている。

## 四、おわりに

本稿では、一〇三項を通して『浪花色八卦』における八卦の意義を考察することによって、作者外山翁の批判的意図とその対象が新井白蛾であるという結論が得られた。遊里で実用される占術的な易を見下していた白蛾を批判する媒体として、遊里に取材する洒落本というジャンルを活用している点に作者の巧妙さが表れている。

はじめに中野三敏氏の言に疑問を呈したが、本稿の結論を踏まえれば、白蛾への批判的姿勢が『浪花色八卦』の本旨であり『易学小筮』をはじめとする小型通俗占書の流行はあくまで副次的な要素に過ぎないと考えるべきだろう。